日本の未来（あした）のために　―神政連―

「年々歳々花相似たり」

愛媛県議会自由民主党
神道議員連盟　幹事
松下　行吉

今年の四国地方の梅雨入りは五月十五日頃で、統計を取り始めて最も早かったとのことです。五月下旬には梅雨末期のような激しい降雨があり、土砂災害に見舞われたところもありました。三年前の西日本豪雨災害は、記憶に新しいところでしょう。また、同じ年の七月から八月、国内では最高気温の記録更新が相次ぐなど大変な猛暑で「災害級の暑さ」と言われています。最近は、「記録的な」といった枕詞の付く自然現象をよく耳にし、豪雨や地震といった自然災害が頻繁に起こっているように思います。まさに異常気象です。今年は災害のない夏となることを願っています。

話はそれますが、今年前半、温暖化をテーマにした『人新世の「資本論」』という新書が話題になりました。「人新世」は、「じんしんせい」や「ひとしんせい」と読みます。四十六億年の地球の歴史を、地層などに含まれる化石や鉱物の特徴で区分けする「地質時代」という考え方があります。例えばアンモナイトが現れた「古生代デボン紀」や、恐竜が登場した「中生代三畳紀（さんじょうき）」などです。今の時代は、人類の文明が栄え、化学肥料やコンクリート、プラスチックなど、人間の活動が生み出した物質がたまり続けています。ノーベル化学賞受賞者のパウエル・クルッツェンは、人間の経済活動が地球に与える影響があまりに大きいため、地質学的に見て地球は新たな時代に突入したと考え、人間の活動の痕跡が地球の表面を覆いつくした時代という意味で、それを「人新世」と名付けました。

『人新世の「資本論」』の著者、斎藤幸平さんは、「急激に進む気候変動に対処するため人任せにせず、一人一人が当事者として立ち上がり、行動しなければならない。そうはいっても、ただやみくもに声を上げるだけでは貴重な時間を浪費してしまう。正しい方向を目指すのが肝心となる。そのためには気候危機の原因にまでさかのぼる必要があり、その原因の鍵を握るのが資本主義にほかならない。大量生産・大量消費を前提とした環境配慮は現実から目を背けており、温暖化対策と経済成長は両立しない、必要以上に利潤を追い求めるのはやめよう」と説いています。この主張を裏付ける事実を、コロナ禍が突きつけています。それは、コロナで経済が停滞した二〇二〇年、世界の二酸化炭素排出量が、前年比で七％減ったという調査結果です。これは、過去最大の減少幅だそうです。残念ですが、どんな環境活動家もここまで我々の意識を変えることはできませんでした。経済成長と脱炭素が両立するのか。一つの回答のように思います。

五月二十六日、基本理念に「二〇五〇年までの脱炭素社会の実現」を盛り込んだ、改正地球温暖化対策推進法が成立しました。日本で法律に温室効果ガスの削減目標が明記されるのは初めてのことです。温暖化に対する危機意識が共有されてきた結果だと思いますが、脱経済成長の覚悟がなければ、目標達成は難しいのではないでしょうか。

年々歳々花相似たり。続く言葉は「歳々年々人同じからず」。人は変わることができます。変えてはならない地球を守るために私たちは、暮らし方を考えなければならないようです。